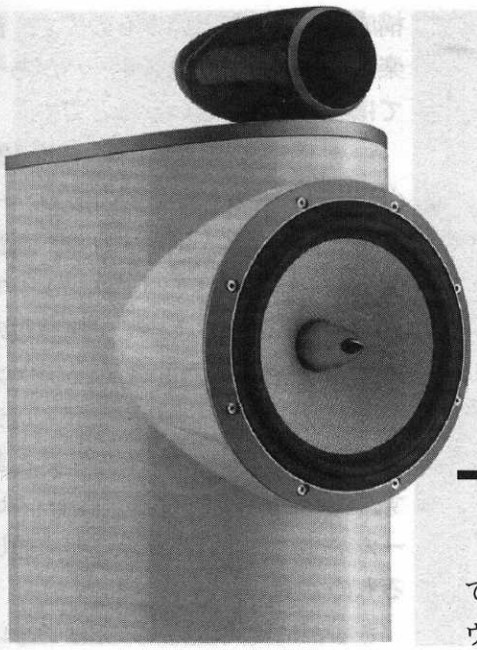


記念モデル“シグネチュア・ダイアモンド”
発売までの40年の歩み

# B＆W開発物語

澤田龍一

2006年10月，東京インターナショナル・オーディオショウのマランツ・ブースにB＆W（Bowers＆Wilkins）の40周年記念モデルであるSignature Diamondの，当時は世界に2ペアしかなかったプロト・タイプが参考出品されました．翌2007年のインターナショナル・オーディオショウでは量産品が使われ，すでに入荷も始まっています．

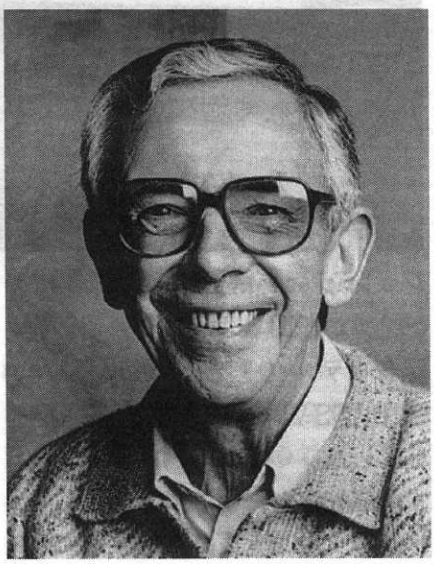
ここではB＆Wの歴史に触れながら，過去の記念モデルと今回のモデルの開発テーマについて記したいと思います．

## 5年ごとの記念モデル

B＆Wの創業は1966年とされています．創業者であるジョン・バウアーズは，パートナーであったロイ・ウィルキンスと1945年に電気器具販売店を始め，1960くらいから自作のスピーカの販売を行うようになりました．彼のスピーカの偉大な顧客であり，よき理解者であった女性が亡くなるとき，1万ポンドを遺贈されました．電気店はロイに任せ，これを元手に新たなパートナーであるピーター・ヘイワードとB＆Wエレクトロニクスを創立してスピーカ事業に乗り出したのが1966年です．

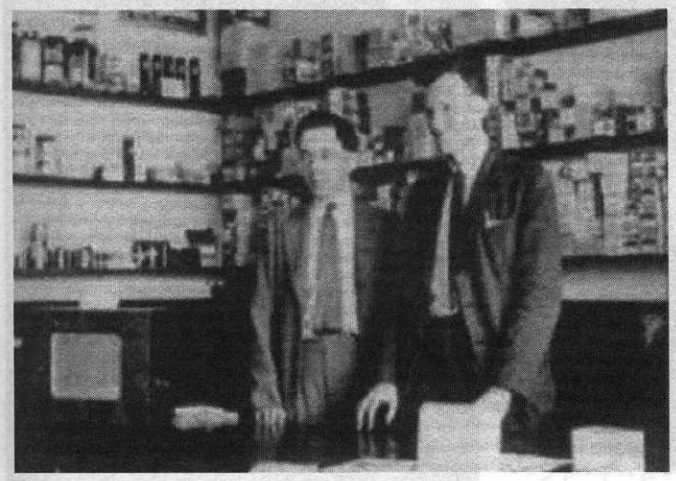
ジョン・バウアーズは，1987年に膵臓癌のために他界しますが，B＆Wは発展を続け，いまや世界的なHiFiスピーカ・メーカーとなりました．この間に記念モデルに関わる

●創業者ジョン・バウアーズ



重要な人物が2人います．1人はエンジニアのジョン・ディブ博士であり，もう一人は1974年から1995年ごろまでデザインを担当した世界的に有名な工業デザイナーのケネス・グランジ卿です．

B＆Wは25周年以降，5年ごとに記念モデルを発表しています．いまやB＆Wを代表するシニア・アコースティック・エンジニアである



● 1945年創業当時の様子

● 60年ころ，自作のスピーカの販売を始めた

● P.ヘイワードとB&Wエレクトロニクスを創立してスピーカ事業に乗り出した

ジョン・ディブ博士は，1986年にタンノイからB&Wに移り，25周年記念モデルであるSilver Signature SS-25（**写真A**）の設計を担当しました．

内部配線のみならず，ボイス・コイルやターミナルにいたるまで徹底的に銀にこだわったこのSS-25は，25周年であった1991年には間に合わず，マランツがナカミチから日本における販売を受け継いだ1993年に市場導入されました．

30周年記念モデルはSignature 30 SS-30（**写真B**）で，これまた1年遅れの1997年に市場導入されました．このモデルはSS-25の発展形で，メタル・コーンのウーファを加えたトールボーイ型とし，ウーファ・パートには銅線が使用されていました．このどちらも，デザインはケネス・グランジ卿が手がけています．

ご記憶にあると思いますが，35周年記念モデルはSignature 800 series/S 800，SHTM，SCMS（**写真C**）であり，これはノーチラス800 seriesの発展形で，めずらしく記念の年の2001年に間に合い，1年後S 805が加わりました．こちらのデザインは，ネケス・グランジ卿のあとB&Wのデザインを担当しているモートン・ワレンです．

## Signature Diamondの3つのテーマ

40周年記念モデルは，B&Wの発展に大きく貢献した前記2人のコラボレーションで生まれました．世界で各色500ペアの限定発売です．

このスピーカのテーマは家庭用としての最高のスピーカです．このスピーカはジョン・ディブ博士の信念ともいえる設計思想がいくつか反映しています．その1つは，2ウェイ構成がベストだというものです．音楽の基音部分にクロスオーバがあってはならない，ということです．

つまり最大出力音圧レベル120 dB以上を確保する必要のあるラージ・モニタなどを別とすれば，基音領域を1つのドライバ・ユニットでカバーすることによって，周波数のみでなく音量に対しても，サウンド・キャラクターやサウンド・バランスの変化の少ない再生ができます．これはかつてフルレンジ・スピーカがベストといわれたことに通じるものです．

さすがに現代のソースではフルレンジ1発というわけにはいかなくて，質のよいトゥイータとの2ウェイ構成とならざるを得ないのですが，要めは広帯域の中低域用ドライバなのです．

2つ目は，その中低域用ドライバについて，B&Wは永年ウォーブン・ケブラー・コーンのユニットを使ってきました．ジョンの持論は，ケブラー・コーンの面積＝能率と強度のバランスから，7インチ（180 mm）口径がもっともよいというものです．変則サイズではありますが，確かに過去のSignatureモデルであるSS-25やSS-30ではこの口径

▲ケネス・グランジ卿

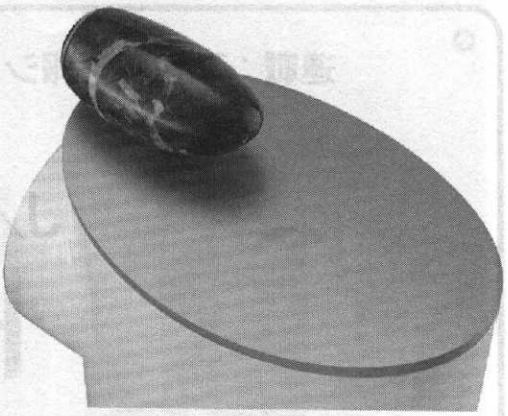
◀ジョン・ディブ博士

●記念モデルに関わったエンジニア（左）とデザイナー（右）

Signature Diamond はカラー・バリエーションとして，光沢ののある白い郵便ポストのような White (**写真 H**) と，濃いやや緑がかった褐色の木目模様の Wakame (**写真 I**) の2タイプがあります．ホワイトはともかく，ワカメという呼称については，つぎのようないきさつがありました．

B＆W のエンジニアたちがブライトンの日本食レストランで食事をしていたときに，エンジニアの一人であるトム・オブライエンが味噌スープに入っていたワカメを見て着想したのだそうです．プロダクト・マネージャーのマイク・ゴフから私に，「カラー・バージョンの名称について Wakame とつけたら日本では問題があるか？」と問い合わせてきたのは昨年の7月のことでした．私は「確かにヘンな呼称だが，日本の会社ならともかく，イギリスの会社がつけるのであれば問題ないと思う」と回答したのを記憶しています．ほんとうにそうするとは思っていませんでしたが……．

実は，ホワイトとワカメではキャビネットの仕様が一部異なります．ホワイトでは，木製キャビネット本体の天板にあたる部分に 10 mm 厚のアルミニウム板が装着されています (**写真 J**)．これはもちろんデザイン上の理由ですが，これだけの厚さのアルミニウム板が接着されていれば，当然天板部分の振動がダンプされ，響きが異なります．私が聴いた感じでは，ホワイトの方が清潔感を伴ったスッキリした響きで，ワカメの方がやや響きが濃く，奔放といったところでしょうか．



《写真 J》White の天板部には 10 mm 厚のアルミが接着してある

この話を B＆W ですると，そのイメージはセットの外観から来る印象と同じなので，ケネス・グランジ卿のポリシー（視覚，聴覚，触覚の一致）にも通ずるということでした．

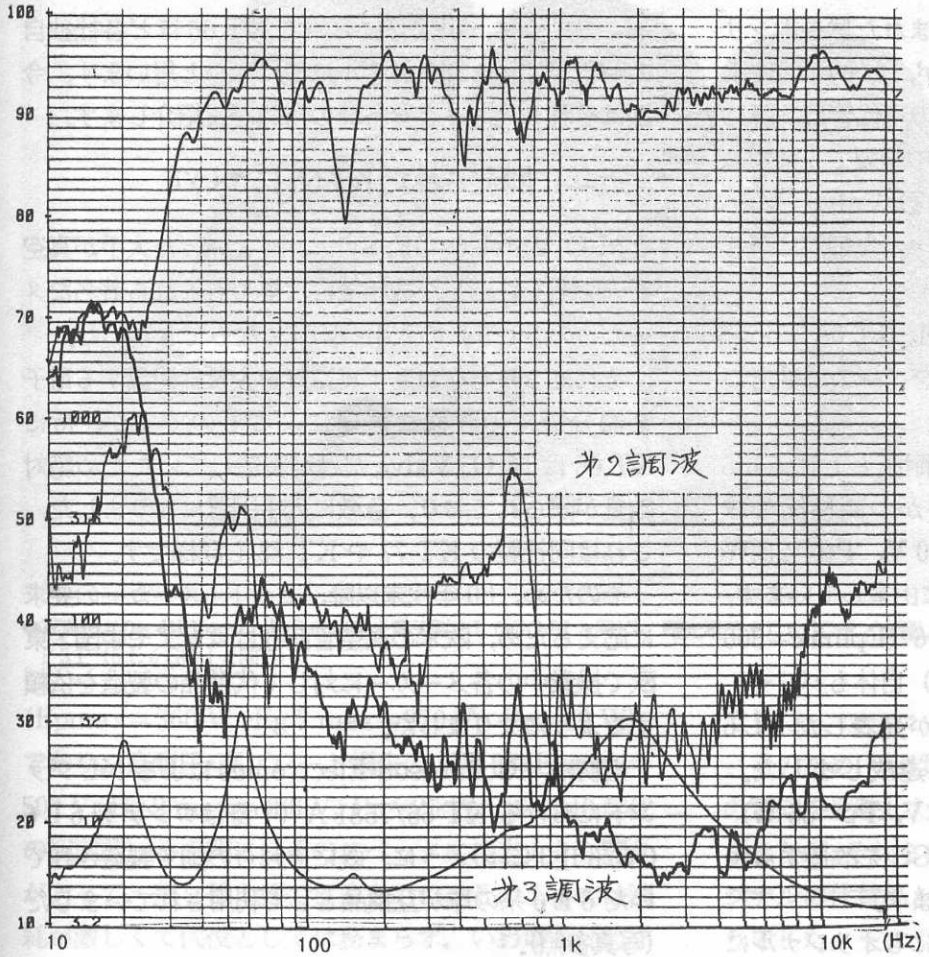
## 特性

測定データを**第1図**に示します．優秀ではありますが，ごく当たり前の特性です．しかし，その音質はデータから読み取ることはできないものです．

音質の特徴は，空間再現性の高さとともに，類まれな明瞭度にあります．キャビネットの音色をほとんど感じません．このスピーカを聴いたあとでは，800 シリーズでさえ木質系のキャビネットの濁った響きを感じます．

× ×

量産セットが届いた8月以来，このスピーカを鳴らしてきました．最高の家庭用スピーカというふれ込みであった Signature Diamond は，モニタ・スピーカとしても最高だという思いを禁じえません．このスピーカは，オリジナル・ノーチラスに匹敵するインパクトを秘めていると感じています．（マランツ ブランドカンパニーマーケティング商品企画本部 音質担当プロフェッショナル）




〈第1図〉シグネチュア・ダイアモンドの諸特性